

# 子供たちに居心地の良い場所を

## 函館市 函館圏フリースクールすまいる

いじめの問題や、心の病を抱えた子供たち……

受験戦争や管理教育の影響で、子供に対するストレスは計り知れないものとなっている。そういった原因から不登校児が社会問題化して以降、その対処や指導は有効な対策を見いだせないまま。教育委員会が実施する「適応指導教室」は、あくまで生徒を学校に復帰させることが前提となっており、子供たちにかかるストレスは学校と変わらない。

全国で12万人。北海道で4100人（文部科学省学校基本調査2010年度調査）。

こうした子供たちは、行く場所がない。

不登校になった中学生は、道南で約400人（2011年度）、中学校一校分に相当する数である。

こうした子供をサポートしたいと立ち上がったのが、「函館圏フリースクールすまいる」代表の庄司証（あかし）さん（33）だ。彼らに心地よい居場所を提供できればと、2012年4月、函館市内にフリースクールを開設、子供たちを支援するスペースを作った。

### ■ 不登校児の受け入れ場所がない

庄司さんは、北海道教育大学大学院を修了後、七飯町のフリースクール「チーフ

キリスト教学園」で勤務、10年間の経験を持つ。さらに、同教育大学函館校の非常勤講師も務める専門家でもある。

フリースクールを始めようとしたきっかけは、そのころの函館市内に不登校の生徒を受け入れるスペースがなかったからだという。

「以前は、2カ所あったのですが無くなったのです。一つは、不登校児の保護者が中心に作った施設であったため、彼らの子供が成長したことで自然消滅してしまいました。もう一カ所は、英会話学校が経営していましたが、採算が取れなくなったのではないのでしょうか」



マン・ツー・マンで教えているフリースクールの様子

学校ではなく、フリースクールという形式について庄司さんは話す。「僕自身、学生のころは、小学校の先生になろうと思っていましたが、教師はいろいろな仕事が多

ぎると感じるようになったのです」。クラスに 30 人から 40 人の生徒がいて、学校の行事などもあり、もっと一人ひとりとじっくり接することができないかと思うようになって、フリースクールに行き着いたという。

「子供は、学校になじめなければ、家庭に居場所を求める場合がおおいのです。平日の昼間、小学生が一人でいる場所はありません。特に小さな町ではなおさらです。そんな子供たちのために、新しい居場所を作ってあげることが必要です」

庄司さんは、熱く語っていた。



函館市大手町にあるすまいるの事務所

## ■ 着実に成果、半数が復帰

庄司さんは不登校の子供たちのために「函館圏フリースクールすまいる」を設立、函館市地域交流まちづくりセンター（末広町）で毎週木曜日を活動日として、子供たちの交流の場を設けた。2013 年 4 月には、同センターのスペースだけでは、手狭になったため、同市大手町の一軒家を事務所を兼ねた教室として借り上げて移転、同時にプログラムも拡充させた。受け入れ体制を、月曜日から木曜日の週 4 回として、時間も午前 10 時から午後 3 時までとした。さら

に、子供たちがゲームや交流ができるフリースペースのほか、高校卒業資格の取得を支援するフリースクール、不登校に関する個別相談、訪問サポートなども始めた。

2013 年 9 月現在、すまいるが支援している子供の数は 15 人。フリースクールに 2 人、フリースペースに 9 人が登録、4 人に相談サポートを行っている。常勤スタッフは、庄司さんを含めて 4 人。そのほか、主婦や学生などのボランティアスタッフ 6 人がおり、充実した体制となっている。

こうしたことから、着実に成果を上げ始め、利用者の追跡調査（「すまいる月報」2013 年 4 月 18 日号）によれば、その約半数が進学や学校復帰、5 分の 1 がすまいるを継続、4 分の 1 が不登校に戻っていると報告されている。

さらに、すまいるでは、北海道渡島・松山地域における生活保護世帯の子供を支援するためのプログラム「子ども健全育成支援事業」の委託を受け、同地域の子供たちに対して訪問サポートを行ったり、メールや電話でのサポートを行ったりしている。

庄司さんによれば、フリースクールの月謝や 50 人の賛助会費（年間 1000 円から）で、なんとか事務所の家賃が支払えるほどという。

子供たちを受け入れるにあたって、注意すべきことを尋ねると、

「放置ではなく、見守るという姿勢が必要なのです」

庄司さんは断言する。

「例えば、子供と別れ際に『また来てね!』、そういつて見送りますよね。でも、

それが場合によってはプレッシャーになってしまうこともあります。また、スタッフや私もそうですが、子供のために何かしたいとの想いで一杯ですから、つつい、やってあげたくなってしまいます。声をかけたり、遊んであげようとしたり、でもそれが押しつけになると、逆に子供の負担になってしまいます。その加減が難しいですね」。

フリースペースに来る子供は、基本的に何をしても構わない。ゲームを楽しむ子、スタッフと一緒に料理を作る子供、中には勉強を始める子供もいる。

「最初は、黙って座っているだけでも、だんだんそこが安心だと分かると、ゲームをするようになります。さらに、子供同士で互いに言葉を交わし、そして一緒に遊び出すのです」

スタッフが見守っていると、子供たちは自然に活動を始めるという。

### ■ 不登校の苦しみを知るスタッフ

すまいるが、子供たちの憩いの場になっている理由の一つに、スタッフの熱意もある。

土居百合亜（ゆりあ）さん（25）は、自分自身も学校でいじめにあって不登校を繰り返していた。だからこそ、同じような境遇の子供たちと真剣に向き合いたいと、スタッフになった。

「以前の私は、学校にも行けず、部屋にこもって、食事も摂れず、自殺ばかり考えていました。そのとき 10 キロ以上も痩せてしまい……夜中に台所に降りていってずっと包丁を見つめていたこともありました

ね。ですから、不登校の子供の気持ちがよく分かるのです」

土居さんは、いまこの仕事ができる充実していますと、目を輝かせている。

また、田中透さん（29）は、庄司さんから直接スタッフに、と誘われた。田中さんは、高校卒業後、統合失調症と診断され、自宅に引きこもっていた。25歳のときにアスペルガー症候群と診断され、デイケアに通所していた経験を持つ。

「最初は子供たちと接するのは不安でしたが、どうすればいいのか、徐々に分かってきました。聞き役にまわって、見守るみたいなことが分かってきたのです。自分は、社会からズレてしまったので、その感覚が分かるだけに、子供たちを優しく見守ることができます」



フリースクールをもっと充実させたいと意気込むすまいる代表の庄司証さん

### ■ 他の支援グループとも連携して活動

すまいるは、他の支援グループとも連携して活動を行っており、不登校の子供を抱える親が中心に活動している「函館アカシア会」とのつながりも深い。

そのアカシア会の昼食会が、すまいるのフリースペースで2013年9月18日に行わ

れ、不登校児の親や、庄司さん、すまいるのスタッフが出席して、登校拒否と教育に関する意見が交換された。



不登校児の親の会「函館アカシア会」との合同昼食会

この席で、アカシア会の代表者であり、すまいるの副代表も務める野村俊幸さんが話していた。野村さんもまた、不登校だった娘を抱えていた。

「学校の勉強は、子供の教育にとってほんの一部でしかないのです。家の手伝いや礼儀作法、子供にはいろいろ学ぶことがあるはず。その一部の勉強だけができないと、子供を全否定することはないはず」

野村さんは力説する。

「私の娘二人ともが、不登校となったのですが、次女が『もう学校に行かない!』と言い出したとき、正直ほっとしました。無理して学校に行ってストレスを溜めるよりも、いっそのこと行かない方が、いいと思いました。学校に行けなくなった子供たちが、撤退する場所、一時退避する場所が、今の日本にはないのだと思います」

野村さんは、不登校に対する知識が以前の自分には無かったと悔やむ。「とにかく長女を学校に引き戻そうとして、酷い目にあ

った」。その時の反省、懺悔の気持ちで、こうした活動を続けているという。

## ■ フリースクールが認知される社会へ

すまいるの今後の目標について、庄司さんは、現在行っている高卒認定支援の学習支援を、小中学生対象まで広げたいと意気込む。さらには、フリースクールが社会的にもっと認められるようにしたいと、大きな目標を語る。

「そんな社会になれば、保護者や教師が、子供に対して、『それじゃ、フリースクールはどう?』とすんなり勧められるはず。そうならば、子供たちも安心できますよね」

### ■ 連絡先

〒040-0064 函館市大手町 9-13

函館圏フリースクールすまいる

代表 庄 司 証

TEL : 080-4349-6463 (10時~15時)

FAX : 020-4665-2265

Email : akashi.shoji@gmail.com

URL : <http://hakodate-smile.jimdo.com/>